

世界のコインを楽しむ

中型銀貨 (6) フランス

第101回

平石国雄

今回はフランスの中型銀貨を扱う。一八六五年に結ばれたラテン貨幣同盟では、フランスの貨幣制度をベースに金・銀貨の基準を制定している。フランスの額面で表すと一〇フラン金貨は金品位900の三・二五gで、二〇フラン、一〇〇フラン金貨はその倍数の量となる。また大型銀貨は銀品位900の二五・〇gであるが、マイナー銀貨は銀品位を835に下げて二フランは一〇・〇gで、一フラン、五〇サンチームはその分数の量となる。

フランスでは第三共和政期の一八九八年、ラテン貨幣同盟に基づく五フラン銀貨が七五枚試作された。残念ながら通常貨として流通したのは、二一フラン銀貨、五〇サンチーム銀貨であった。中型銀貨である二フラン銀貨は、直径二七mmで銀品位835の一〇・〇gであり、一八九八年から一九二〇年まで作られている。一八九八年(写真①)と一九一六年(写真②)のもの、の写真を掲載する。表面には試作五フラン銀貨と同じデザインで、サミューズ(種まき娘の立像)が描かれている。セミ特年は発行数五〇万枚の一九〇〇年と一九一三年である。また一九一四年は、南フランスのカステルサラシン(ミントマーク「C」)でも作られている(写真③参照)。

第五共和政期の一九六〇年に、サミューズを描いた五フラン銀貨が中型銀貨として復活する。直径二九mmで銀品位835の二・二〇gであり、一九六九年までの一〇年間作られている。一九六〇年(写真④)と一九六九年(写真⑤)のものを写真を掲載する。裏面は試作で終わった一八九八年の五フラン銀貨のデザインが採用されている。一九六七年以降はやや希少である。また、一九七〇年以降は同じデザインの白銅貨に変わる。

一九八二年には、表面にパンテオンを描いた一〇〇フラン中型銀貨(写真⑥、一九八六年プルーフ)が作られる。この銀貨は直径三一mmで銀品位900の一五・〇gであり、貨幣体系がユーロに切り替わる直前の二〇〇一年まで作られている。一九八六年までは多く作られているが、一九八七年は一〇万枚程度で、以降一九九六年まではさらに少量の発行となり、一九九七年一〇一年はプルーフ貨のみの発行となる。

次回はイタリアの中型銀貨を扱う。



写真④ 5フラン銀貨 1960年



写真① 2フラン銀貨 1898年



写真⑤ 5フラン銀貨 1969年



写真② 2フラン銀貨 1916年



写真⑥ 100フラン銀貨 1986年プルーフ



'C'部分拡大



写真③ 2フラン銀貨 1914年'C'